

## 「学生とシニアの対話 in 八戸工業大学」報告書



報告書とりまとめ 西郷 正雄

### 【概要】

今回で 11 回目となる八戸工大での対話会が 2 月 3 日に開催された。今回は、「地域経済と原子力産業を考える」といった内容のシニアと学生とが一緒になって考えるといったテーマであった。開催間際になって指導教官の佐藤学先生が突発のアクシデントにより急遽欠席されたために、石山俊彦先生が大学側の指導を行うこととなった。我々シニアは、いつものせんべい汁昼食会から参加した。グループごとの学生との食事懇親により、両者の融合を図り、学生とシニアとの対話に臨んだ。グループディスカッションは、3 年生の学生ということもあり、発言は少な目であり、従来と同じように、シニアからの問いかけによる誘導で発言するといった雰囲気は拭えなかった。しかし、発言は、しっかりした内容のものであった。東北地方のもの静かな性格の中に一本芯のある学生達の集まりであった。

なお、参加者は学生 43 名、教職員 4 名、参加シニア 12 名の総勢 59 名である。

(1) 日時： 2017 年 2 月 3 日 (金) 13:00 ~ 17:00

(2) 場所： 八戸工業大学 メディアセンター1 階メディアホール

(3) 参加者：

(学生) 全員学部 3 年生で 43 名 (内、女子学生 2 名)

機械情報技術学科 13 名 電気電子システム学科 13 名

バイオ環境工学科 13 名 システム情報科 4 名

(教職員) 橋本副学長女史、石山俊彦先生、野田英彦先生、畑中広明主事

(SNW) Gr1--西郷正雄、Gr2--若杉和彦 (世話役) Gr3--川合将義、Gr4--大塔容弘

Gr5--早野睦彦、Gr6--早瀬佑一

(SNW東北) Gr1--阿部勝憲、Gr2--栗野量一郎 Gr3--安保文尋、Gr4--岸 昭正

Gr5--工藤昭雄、Gr6--矢野歳和

#### (4) スケジュール

- 12:30～13:20 昼食会・懇親会
- 13:20～13:35 開会の挨拶、参加シニアの紹介
- 13:35～14:30 基調講演：地域経済と原子力産業を考える（大塔容弘）
- 14:30～14:40 休憩
- 14:40～16:30 シニアとのグループディスカッション
- 16:30～17:20 グループ発表
- 17:20～17:30 講評・閉会の挨拶(参加者アンケート記入)
- 17:30～17:40 集合写真

#### (5) 開会の挨拶

八戸工大の橋本副学長女史より、対話会の意義とシニアへの歓迎の挨拶の後、工藤シニアより、「関係者のご努力によって年々対話の質が向上してきたと感じていること。テーマが今までの技術重点的なものではなく、“地域経済と原子力産業を考える”といった地域にふさわしいものとなっていて、活発な対話会となることを期待する。」との挨拶がなされた。

#### (6) SNW/SNW東北 メンバー紹介

若杉世話役からの「SNW」、および「SNW東北」のメンバー紹介に合わせて、各人からの簡単な紹介がなされた。

#### (7) 基調講演 SNW 大塔容弘氏

基調講演のテーマ「地域経済と原子力産業を考える」をご提示した佐藤教授のご趣旨は、「何故、青森県には原子燃料サイクル施設があるのか。現在の地域経済とどのように関連しているのか。」を理解した上で、学生とシニアの対話を深めたい、というものであった。

そこで、講演者の専門が再処理であることから、六ヶ所村の原子燃料サイクル施設を例に取り、①日本における再処理開発の歴史、②再処理施設を中心とした原子燃料サイクル施設が六ヶ所村のむつ小川原開発区域に進出することになった経緯、③その後のむつ小川原開発区域の目覚ましい展開を紹介することで、佐藤教授のご趣旨にお答えしたものである。

#### (8) グループディスカッション

##### グループ-1



記) 阿部勝憲

(参加者)

学生：3年生7名

機械情報技術(2)、電気電子システム(2)、  
バイオ環境工学(3)

シニア：

阿部勝憲 (SNW 東北)、西郷正雄 (SNW)

(対話内容)

学生食堂でせんべい汁昼食をとりながら顔合わせをして簡単な自己紹介をしたところ、全員が3年生の原子力体感研修を履修し、夏の六ヶ所地域、秋の東通・むつ・大間地域見学と1月の報告会に参加していた。出身地は青森県4名(青森市、八戸市、野辺地2)、岩手県1名、秋田県1名、静岡県1名であった。

メディアセンターに移り、基調講演に引き続いてシニア阿部が司会役となり対話を進めた。はじめにテーマ「地域経済と原子力産業を考える」に関して疑問を各自で出し合った。八戸の大学で学び研修で下北半島地域の原子力現場を見聞したためと思うが、県外出身者含めて原子力を地域の産業と受け止めてからの疑問と感じた。

- ・原子力施設が青森に集中しているが地域の雇用になっているか。
- ・青森県には原子力産業と農業などがあるが県として将来どうするのか。
- ・発電所やサイクル施設がもしなければどうなっていたか。
- ・低レベル埋設施設はあるが、高レベル埋設はどうするのか。地域には関係あるのか。
- ・原子力への賛成反対をみると年齢層に差があるようだが、将来関わる若者が大事では。
- ・再稼働に地域住民の理解得るのにどのような工夫しているか。

主な対話を以下にまとめる。

○地域の雇用に関して、はじめにシニアから発電所やサイクル施設などの原子力プラントでは直接の企業に加えて多くの協力企業が参画していること、また輸送、宿泊、商店など地域のサービス業にも効果あること、下北半島は原子力関連のインフラで自然エネルギー開発にも有利なことなど話した。学生諸君は協力企業が大きな役割を果たしていることを研修で先輩から聞き納得していた。原子力関係志望の女子学生から、原子力の専門知識はどのくらい必要かなど具体的な質問があり、学科の専門をきちんと学んでおくこと、原子力は入れればいくらかでも学べると激励した。地域の雇用のため原子力を進める必要性は分かるが福島事故の影響や最終処分場問題など考えると複雑であるとの意見には、地域では雇用の解決だけでなく我が国のエネルギー問題への貢献から誘致したこと、また事故の後に竜巻対策など安全性の点検が格段に進んでいること話し合った。将来性に関して、原子力を含むエネルギー産業と一次産業を地域でバランスよく進めるといふ青森県の長期計画を紹介した。

○原子力の理解に関しては、反対が多いのは中高年のように思うが大人の経験が大事でもこれから50年も生きるのは若者なので、賛成が多い若者の考えを大事にしてほしいと注文された。自分たち学生は研修で現場を見て賛成だからという発言であった。シニアから賛否の調査では新聞やテレビにより偏りがあるので複数のメディアを比べること、また事業所では対面で具体的な安全対策を伝える努力をしていることなど話した。

発表では、1班の7人それぞれが自分の疑問から得たポイントを話したのは良かった。対話会を通して、研修により地域の視点で原子力の理解が深められていること感じた。3年生の原子力研修の一環として対話会を位置付け準備いただいた関係者に感謝します。

## グループ-2

記) 栗野量一郎



(参加者)

学生：3年生 6名

機械情報技術(2)、電気電子システム(2)、

バイオ環境工学(2)

シニア：

栗野量一郎 (SNW 東北)、若杉和彦 (SNW)

(対話内容)

対話共通テーマ「地域経済と原子力産業を考える」は、学生から質問を出し辛いことから、午前の学習及び基調講演を踏まえ、全員から疑問あるいはもっと詳しく聞いてみたいことを挙げてもらった。その結果当班では次の4点について絞って対話を行った。

- ・なぜ下北半島に原子力施設が集中しているのか？またもし原子力施設が誘致されていなかったらどうなっていたらだろうか？
- ・いろいろな発電方式があるのに、なぜ原子力だけが批判対象になってしまうのだろうか？
- ・原子力施設立地に伴う地元の理解と協調はうまくいっているのだろうか？
- ・福 I 事故を踏まえた安全対策と今後の課題。また新規規制基準が決められたが、これに合格しても再稼働できないのはなぜか？

以上に対し、それぞれ学生全員から意見を誘導する形で対話を進行させた。その中で出てきた主な意見は次のとおり。

### 1. どうして青森なのか？そして もし原子力施設がなかったら？

これに対しては、海に近いこと、強固な岩盤などなどの各立地条件についてなぜそうなのかを考えてもらった。そのうえで日本国内にも下北と同様適地はあるものの、青森で誘致した経緯は基調講演であった通りと再確認した。

次いで「もしなかったら」という面では、地元の雇用もなく、ただですら少ない人口がますます流出して、下北には人がいなくなってしまうのではないかとか、「八戸工大」の存在意義も大きく異なっていたはずで、今の先生たちも仕事にありつけなかったのではないかと、などのユニークな見方も出された。なお話し合いの中で漁業や農業でやっていけないのではないかと意見も出たが、大間とナガイモだけでは焼け石に水と認識した。

### 2. なぜ原子力だけが批判を受けるのか？

どうして未だに原子力反対の声が多いかに関して、国民の理解不足とそれに対する早期からの教育の必要性などを話し合った。そして悪いことばかりを流すマスコミや、地域外の人が煽っていることなどの実態も確認した。なお放射線は目に見えないので恐怖を煽ることが出来るからでは という面白い意見も出た。そして国内では直接放射線による死者は JCO 事故の 2 名だけとい

う事実も国民に知ってもらう必要があるとした。

### 3. 発電所への地元の声。地元の理解と協調

自然を壊して施設を建設して、地元からの苦情はないかとの質問に対し、自然を保つということとはどういうことなのかについて意見交換した。また環境アセスや工場法などで自然環境を保持する仕組みがあることも話した。

なお立地点の自治体は多くは再稼働に賛成している実態から、このようなところの人々との対話も大事であるとした。

### 4. 福島事故以後取られた安全対策について

安全対策については、学生は原子力体感研修で原子力施設をすでに見学しているので、ちょっとした例を挙げただけで、実際の対策を思い出した。なお対策はすればするほどお金がかかるが、一方では電気代が高いと文句を言う人々の矛盾や、「危険なものほど安全」と言った元東通村長の言葉なども出てきた。その中で、特に生理的に放射線を怖がる女性層などを納得させるため、被ばく量や食品に関する日本の基準の数値がどのようなものなのかをしっかりとつかんでおくことの大切さもお互いに認識した。

## グループ-3



記) 安保文尋

(参加者)

学生：3年生 8名

機械情報技術(2)、電気電子システム(2)、  
バイオ環境工学(2)、システム情報(2)

シニア：

安保文尋 (SNW 東北)、川合将義 (SNW)

(対話内容)

(1) 対話テーマは「地域経済と原子力産業を考える」であり、学生が事前に議論した論点について対話を行った。議論の論点は、原子力産業立地による①雇用の観点からのメリットとデメリット、②暮らしやインフラの観点からのメリットとデメリット、である。雇用の観点からのメリットは当然として、原子力産業の撤退時に生起するデメリットにつき危惧している学生が少数ながらいた。暮らしやインフラについては、電源三法などや財政支援などの制度によりインフラ整備が進んでいることを学生は理解している。ただ、暮らしについては、下北地区の未開を意識しているようであり、街づくりが進んでいない現実を懸念していたようである。原発事故による影響への懸念も表明されたので、事故対応を説明した。

(2) 上記の学生の論点に加え、シニアからの意見として、地域経済の発展には、大きな企業の立地だけではなく周囲に高度な技術集約の中小企業が必要であり、地方の大学を中心とした産学連携の機能が重要であることを伝えた。またこのような例は、ドイツの地方都市、ま

た我が国でも大都市だけではなく新潟燕三条や弘前市などの周辺にも技術的に海外企業に伍する中小企業があることを伝えた。即ち、誘致企業と地場産業や技術力とのマッチングが重要なこと、そのため、地方大学における技術教育は重要であり、本大学の重要性を伝えた。

(3) 学生は、専門分野以外に原子力施設の視察や研修会などで原子力に理解しているようである。学生からの質問として、高レベル廃棄物の最終処分のあり方、福島原発の廃炉の方向などまだ未確定の内容があり、それぞれ現在行っている計画を伝えたが、学生は問題意識をもっていることが読み取れた。

(4) 対話後、学生からのグループ発表があり、上記(1)の観点を中心として発表がなされた。発表のための討論時間は与えたつもりであったが、残念ながら(2)が反映されておらず、重要な観点が不足していた。今後、資料に頼らないプレゼン力が必要である。また、彼らの理解を知るためにもシニアからの質問タイムが欲しいと感じた。

## グループ-4



記) 岸 昭正

(参加者)

学生：3年生 8名

機械情報技術(2)、電気電子システム(2)、  
バイオ環境工学(2)、システム情報(2)

シニア：

岸 昭正 (SNW 東北)、大塔容弘 (SNW)

(対話内容)

対話テーマは「地域経済と原子力産業を考える」で、このテーマは佐藤学教授と若杉さんのメールのやり取りの中で佐藤教授の提案で決まったようだ。青森県が原子力産業を誘致した結果、現在多くの産業や研究施設が立地されており、雇用が生まれていること、また電源三法交付金で地域のインフラが整備され、便利になってきたことを改めて自分たちで考え、そのメリット・デメリットを話し合っただけという趣旨が予め学生たちにメモで伝えられていた。今回の対話会では日本原燃 OB で青森県の事情に詳しい大塔さんが六ヶ所村を例として「地域経済と原子力産業を考える」と題した基調講演で大変詳しい地域の原子力産業の歴史と現状について話された。対話はこれに基づいて質問を受ける形で進められた。学生たちは当日の午前中に同じテーマについて各グループで話し合っており、仕事・職場においてどんなメリット・デメリットをもたらしてきたか、また暮らし・インフラ面でも電源三法交付金がどんなメリット・デメリットを与えてきたか考えたようで、断片的なメモを作っていた。対話の中でシニアの大塔さんは、青森県は日本で風力の発電量が最も多く、その多くは下北半島にあること、またこれには原子力施設が集中しているため送電網が発達してきたことが役立っていることなどを説明した。質問では風力発電で雇用は増えるのか、原子力発電の再稼働が遅れており、LNGが大幅に増えているが、火力発電

の燃料の調達について将来的に心配はないか、電源構成の推移はどうなっているかなど、重要な問題についても話し合った。

原子力発電のメリット・デメリットでは、青森県内の原子力施設を色々見学して勉強していることもあり、エネルギーセキュリティーや環境問題について理解しているのが分かった。また、危険なイメージを伴っていることも気にしており、原子力産業がすべて撤退すると地元の産業が無くなるという現実的な心配も持っているのが分かった。

纏めの発表では、対話したことの他に午前中グループで話し合ったメモを中心に、原子力産業のメリット・デメリット、暮らしインフラに対するメリット・デメリットを挙げていた。

## グループ-5

記) 早野睦彦



(参加者)

学生：3年生7名

機械情報技術(3)、電気電子システム(2)、  
バイオ環境工学(2)

シニア：

工藤昭雄 (SNW 東北)、早野睦彦 (SNW)

(対話内容)

シニア、学生それぞれが自己紹介した後、電気電子システムの鈴木君が司会役を買って出て、午前中話し合った電源三法交付金についての良い点、悪い点について各学生の思うところを述べ合った。良い点は当然ながら雇用創出や生活が豊かになることであるが、一方では単年度予算であるため長期ビジョンに立った計画が立てにくい点や箱モノだけに頼るのでは真に豊かにならないなどの意見が出た。真に豊かになるためには教育や精神面の充実が必要であるとの定番の意見の域を出ず生煮えになった。そのため原子力の必要性やメディアの報道について議論することにした。

その後の内容は5 Grの結果報告の通りである。

- 豊かな生活のためには高収入の雇用創出が必要であり、そのためには教育の充実も図って魅力のある地域にして人口増加に繋がるようにする。
- 先ずは経済性の向上が必須であり、原子力は不可欠であるにもかかわらず、メディアによる原子力の否定的イメージの定着は問題である。

↓

- メディアに惑わされず、物事を正確に判断して人生において納得できる選択を行うことが必要である。
- 技術には必ずメリットとデメリットがあり、それを考えた上で技術を利用する必要がある。
- 電源三法交付金は確かに地域を潤すが、その地域の人々は日本のエネルギー産業を支えているという誇りを持つ必要がある。

## グループ-6

記) 早瀬佑一

(参加者)

学生 : 3年生7名

機械情報技術(2)、電気電子システム(3)、バイオ環境工学(2)

シニア : 矢野歳和 (SNW 東北)、早瀬佑一 (SNW)

(対話内容)

- 対話テーマ「地域経済と原子力産業を考える」が漠然としていたため、対話のきっかけとして、シニアから「卒業後の就職先の希望」を聴くことから始めた。2名が地元原子力職場、もう1名が地元電力会社を希望。他も地元就職を希望。
- 原子力発電所の再稼働の是非について、6名が再稼働容認。発電所でのインターンシップや施設見学で、安全対策がしっかり実施されていることを自身で確認した。1名は、緊急時対策が改善され、発電所職員のコミュニケーションが改善されるとの条件付き容認。
- 安全性について、一般の人は良く知らないから判断できないのではないか。政治家（例えば総理大臣）、専門家が分かり易く国民に説明すべきである。学生は、「原子力工学コース」を選択し、東北電力東通原子力発電所や六ヶ所再処理施設等でのインターンシップや施設見学（防波堤等）で自ら勉強し、今の発電所は安全性が十分に向上しているときちんと判断できる。これまでにまして安全実績を蓄積することが大切。メディア報道は必ずしも正確ではない。
- 一般の人は、原子力のリスクを過剰に考えすぎである。安定電源であり、CO<sub>2</sub>排出ゼロである原子力の小さいリスクは受け入れても良いのではないか。反対する人は、電気の利便性を無視して、リスクが大きく受け入れられないと言う。
- 原子力、放射線について、子供のころから丁寧な教育を展開すべき。
- 電源3法交付金は、福祉、インフラ整備に役立っているが、維持費確保が地元に残される大きな課題である。
- 以上の様々な意見を下記6点にまとめ、発表した。
  - ・原子力発電所は安全に稼働することが望ましい。
  - ・原子力がより安全かを判断するのにインターンシップ・施設見学が望ましい。
  - ・原子力の実態を知ったうえで賛否を決定してほしい。
  - ・小さい頃からの教育が大事。
  - ・マスメディアの報道に流されすぎない。
  - ・原子力が地域に与える影響は大きい（福祉・インフラ等）

### (9) 学生発表

プレゼン用メモ資料を使って、前記対話内容を掻い摘んで、各グループより発表された。

聴講者(学生、シニア)からの質問は、時間の関係より割愛された。



## (10) ご講評 SNW東北 矢野歳和様

本日の対話会を終えて再確認して頂きたいことは、青森県の下北から八戸付近の地域は日本の原子力利用を支えている重要なエネルギー基地であることです。核燃再処理施設や原子力発電所を誘致する際に、青森県が日本のエネルギーを支えるのだという強い思いがあったと伺いました。本日、学生のグループ発表にあったように原子力発電所の再稼働には大多数が賛成である一方、年配者や反対派が足を引っ張っているが、我々若い世代に任せてほしいとの意思表示には心強い思いを抱きました。

現在はもんじゅの見直しが提案されているが、FBR（高速増殖炉）と使用済み核燃料からプルトニウムを抽出する核燃サイクルは、初期燃料の 80 倍のエネルギーを生み出し、冷却期間も 10 分の 1 とはるかに短くなり、資源の無い我が国にとって最適で非常に優れたシステムであることを再認識して頂きたい。現在の石油や天然ガスに頼るシステムは地球温暖化の元凶であるのみならず、一発のミサイルでタンカーが攻撃されると今すぐにでもエネルギーパニックを引き起こすことも想像して頂きたい。

また放射線に対する過度な警戒心が原子力利用を阻んでいるが、放射線は低線量では問題がなく、安全か危険かの判断は定量的にできるので、若い皆さんは放射線や原子力の安全対策をよく学び、地域とともに誇りを持って日本のエネルギーを支えて頂きたい。

## (11) 閉会挨拶 SNW 早野陸彦様

本日のテーマは、「地域経済と原子力産業を考える」というテーマでした。このテーマを選んだのは学生諸君自らののか先生方なのか分かりませんが、このテーマを聞いて漠然とした地方の不安を感じ取ったのは私だけではないかもしれません。

地方にいと学生として社会人になるための必要知識や原子力産業の将来にどうしても関心が行くのは致し方ありませんが、会社に入ると否が応でも専門性が求められ、会社という規制が入ってきます。今学生のうちにできるだけ視座を高くして視野を広げることが大切です。

例えば、原子力を語る前にはエネルギーについて知ることです。エネルギーを語るには世界を知ることであり、文明の歴史がいかにエネルギーに依存してきたかを知ることです。

私たちシニアは 20 世紀に生まれ 20 世紀を過ごしましたが、君たちの舞台は 21 世紀です。20 世紀後半のわが国は敗戦で何も無い時代から立ち上がりましたから、苦労はあったかもしれませんが、確実に右肩上がりのある意味単純な時代だったと言えるでしょう。しかし、21 世紀は私たちシニアの時代と大きく異なり、国内的には豊かで飽和しきった生活環境と少子化環境、国際的には頼りとしたアメリカの核の破れ傘と世界の警察としての役割放棄、アジアでの中国の台頭は明らかであり、日本の立ち位置はきわめて不安定になり、いよいよ厳しい時代に入ると思います。

このような環境を生き抜くにはお仕着せを身につけても役に立ちません。一人ひとりが自分の頭で考えることです。そして、サイエンスリテラシーとメディアリテラシーに磨きをかけるのです。

学生はその時代の花形産業に目を向けて天井買いをします。私の時代もそうでした。しかし、花形産業が何十年も続いたためしはありません。また、過去の事例が繰り返されることもありません。エネルギー問題を根底から考えれば原子力は必ず復権します。その時に備えて力を蓄えてください。

## (12) シニアの感想

### (グループ-1) 阿部勝憲

雪景色のキャンパスの入り口に大きな立て看板があり会場のメディアセンターでスタッフの方々にお会いした。佐藤先生から急にバトンタッチされた石山先生や新しく事務担当された畑中さんはご苦労されたと思うがこれまで通りの温かいお出迎えで安心した。学生食堂での八戸せんべい汁昼食で対話グループの7名の学生諸君と顔合わせし、皆が原子力体感研修に参加したことや西郷様のこれまでの原子力との関わりなど伺えて良かった。

対話会のはじめに橋本副学長のご挨拶があり、大学執行部の方に会の意義を理解いただいていること実感した。大塔講師による講演は、地域経済と原子力産業を考える（六ヶ所村を例として）と題して、原子力開発の黎明期やサイクル施設実現までの歴史的経緯を詳細にまとめたものでシニアには大変興味深かった。六ヶ所エネルギーパークなど最近の話題もあり豊富な内容であった。ただしスクリーンの方が細かすぎたのは残念であった。

対話の話題の中心は、青森地域の雇用関連であり、研修で原子力プラントや研究施設の現場見学を体験した上でのそれぞれの思いや疑問であると感じた。学生諸君は青森県の産業構造や将来性に関心あるようで具体的なデータを持ってくるべきであったと反省した。各班の発表から、「若い世代では賛成多いのに全体では批判されるのは」、「地域はエネルギー問題に貢献している」など、研修で地域の現場を学んできた結果感じる現在の風潮へのもどかしさを共有していたように思う。これからも考えていってほしい。来年もぜひ企画が続くことを願う。

### (グループ-1) 西郷正雄

今回の対話会の「地域経済と原子力産業を考える」のテーマは、従来のように、シニアの知見を提供するというよりも一緒に考えて見ようといったものだ。従い、学生たちに意見を個々に一件ずつ出してもらって対話会を始めた。その時に、学生が出す課題について、皆で話し合いたかったが、どうしても課題提供者一人が発言する状況になり、シニアから、他の学生に振って意見を求める状況となった。彼らはおとなしく、自分の場になれば意見を言うが、他の方の課題にはあまり発言しない。まだ、3年生ということなのでおとなしいのかなと思うが、やはりもっと積極的に意見を言うようになってもらいたいと思う。

社会に出れば、自分の意見をはっきり言って相手に存在感を与えることが大事なので、指導教官は、そのような点からの指導を期待したい。特に社会に出るとプレゼンの大切さを痛感するものと思われるので、先生方のご指導を是非お願いしたいです。

### (グループ-2) 粟野量一郎

原子力施設に近い大学であること、事前に原子力施設体感学習として各所を見学していること、そして当日午前も勉強会を行い今回の対話に臨んでおり、学校の取り組みと学生の意識も他校より高いと感じるが、ただ一昨年と比べると多少熱気が足りなく感じられた。

参加した学生は全員黒スーツであったが、教職員側はそれと対応せず、多少ちぐはぐさを感じた。それでも弾んだ対話が行えた。しかし発表はどの班も下手であった。その前に実施した福島高専は

対話以上にユニークな発表がなされたのとは対照的である。

次回への対応として次のことを要望したい。

- ・事前の質問書作成は無理としても、午前の勉強会で各班ごとに質問項目を整理し、紙に大きく書いておくなどすれば、もっと対話はスムーズに進行できると思う。
- ・昼食会は、その後の対話をスムーズに進めるためのアイスブレイクとして八戸工大の特徴であるが、事前に班ごとにテーブルを指定してもらいたかった（今回シニア側で誘導した）
- ・今回は時間の都合でグループの発表についての質問時間を取らなかったことは残念である。

その他 シニアの中ではネット情報を鵜呑みにしている方もいたようだが、専門以外のことはなるべく慎みたいと改めて自覚した。

### **(グループ-2) 若杉和彦**

八戸工大の機械情報技術科等の学生43名との対話会に参加した。今回は11回目に当たり、工大側の希望により「地域経済と原子力産業を考える」とやや難しいテーマを選んだが、学生からは地域に密着した質問が数多く提起され、活発な対話となった。当日は橋本副学長が開会の挨拶で、対話会の意義を説明され、都合により欠席された佐藤先生に交代して石山先生が進行役を務められた。

青森地方は原子力の上流から下流までの施設が揃い、国の一大原子力拠点となっており、毎年優秀な人材を提供する意味で八戸工大の責任は大きく、そのことが今回の対話会の姿勢にも表れているように感じた。対話会後は場所を移して石山先生や野田先生を交えてシニアとの懇親会が開催された。外は雪がちらつく寒さであったが、原子力の将来を憂える熱い意見の交換となった。今回の対話会を企画し、実行された工大側の先生方に厚く感謝申し上げたい。このような対話の機会が我々シニアに代わって将来を担う若い学生達の成長に少しでも役立つことを念じている。

### **(グループ-3) 安保文尋**

- ・対話の場の設定など機能的な学校側の配慮に感謝したい。しかし、全員が素晴らしい学生であるが、聞くだけの学生が多く対等の対話になっていない。それが発表に現われたといえる。
- ・地域経済は学生の専門分野以外であり対話が困難な場面があった。しかし、社会に出れば企業と地域とは密接不可分であり、今回のテーマは大切であったと思われる。
- ・この観点で、基調講演は問題提起でなければならない。原子力発展の歴史は重要であるが、今回のテーマには後半の立地企業の現状を説明し、そして経済的効果を加える必要があり、時間配分と内容を吟味する必要があった。シニア側も反省しなければならない。

### **(グループ-3) 川合將義**

今回の対話会は、「地域経済と原子力産業を考える」という共通のテーマで実施された。安保氏と一緒に第3班を担当した。今回のテーマは、これから地元での就職を希望する学生さんには、格好のテーマであろう。そこで学生同志が、対話会に先立って仕事場として、暮らしやインフラから見ての得失が議論し、最初にその結果が示された。原子力産業のメリットに関しては、良く捉えて

いて、彼らの原子力への期待の大きさを感じた。彼らの議論結果に基づいて対話を進めた。

先ず、原子力産業が現在交通の便の悪い下北半島に限定されていることを欠点に感じ、産業の振興に伴うインフラ整備の得を余り感じていないことである。即ち、事業の展開を意識していないことに気づき、産業の活性化とは何かを質問した。回答がないため、これまでの砂鉄や甜菜事業の破綻のことを示し、ただ企業を誘致すれば良いというものではなく、その企業を活かすこと、社員のやる気と創意工夫が重要である事を伝えた。IFMIF をもとに核融合炉事業の展開もあり得る事を述べた。暮らしに対しては、原子力事故への懸念が示された。これには、1F 事故を教訓に津波対策やフィルタードベントの設置等の改善がなされて、2号機のような大量放出の危険性は非常に低くなったことを伝えた。

事前の議論とともに、対話会に対する学生諸君の真面目さを感じた。但し、発言はどうしてもシニアの多さが目立ち、もう少し食いついて欲しかった。

#### (グループ-4) 大塔容弘

多くの学生たちの感想は、講演内容が難しいというものであった。経済理論を振りかざして基調講演テーマを解説したものでなく、基調講演概要に書かれているように、過去の歴史を淡々と振り返り、原子力施設というインフラが新しい産業を呼び込んだという事実を淡々と述べたものであるにも係わらず、そのような感想が述べられるのは、講演者として予想外であったというのが、正直な気持ちである。

目の前の現実を理解するために、その背景となる過去の経緯をさかのぼることにより、より理解を深めるという習慣を学生時代に身に付けて欲しいと切に願う次第である。

#### (グループ-4) 岸 昭正

八戸工大でのシニアと学生の対話会は今回で 11 回目になった。SNW でも最も歴史を重ねてきた実績を誇る対話会だ。八戸工大の関係者の熱心な取り組みに敬意を表したい。

今年のテーマは「地域経済と原子力産業を考える」という全グループ統一のテーマで、いつもの「放射線のリスク」や「エネルギー問題と環境問題」といった SNW としては慣れたテーマとは勝手に違った面があった。確かに八戸工大の学生さんには改めて考えて貰いたい重要なテーマではある。また大学として原子力産業の理解浸透に努めており、学科横断的な原子力子教育を長年実施してきており、施設の見学会などを通して実績をあげていることも伺っている。ただ、対話では中々焦点が定まらず、漠然とした対話になった感があった。

また、対話の内容に全員が集中できず、テーブルの両端で少人数の間の対話になってしまうといった形になったりしたのは進め方として問題だった。ただ少人数の方が話が弾むのも確かで、纏まらないながら活発な質問・応答があったとの印象を持った。

#### (グループ-5) 工藤昭雄

1. 今回のテーマ“地域経済と原子力産業を考える”の対話に非常に期待していたが、残念ながら本格的対話にならなかったと感じている。

2. これは自分が担当した第5グループのみならず、他グループも同様のようで、テーマを自分たちの興味のあるものに変えて対話を行ったことが、グループ発表から分った。
3. 第5グループでは、シニアからファシリテータ&発表者を務めた学生に、自分が下北のどこかの町長、村長だったら、今後どのように原子力産業と付き合い、地域を豊かにしていくかとの観点から対話をリードして欲しいとお願いした。  
しかし (a) 先人が原子力施設導入を決断したのは正しかった (b) これにより地域の雇用が増えたという事以上の議論にはならなかった。
4. その結果 (a) 各人の将来への希望 (b) 原発の必要性と再稼働推進、メディア情報の正しい取舍等についての対話をする事になった。
5. 今回のテーマは各人の科学技術的知識に加え、世界観、社会観、人生観、価値観がある程度育っていないと難しかったかも知れない。今回のテーマを再び取り上げる為には、やり方にもう一工夫必要と思う。
6. 対話会印象について (a) 消極的なところはなく (b) 纏め、発表、ファシリテータもすぐ決まり (c) 各人それなりの意見を述べていた事を最後に付記したい。

#### (グループ-5) 早野陸彦

八戸工大の対話会に初めて参加した。この会はそろそろ 11 回目とのことで SNW の対話会開始当初から継続しているようである。受け入れ態勢もなかなかのもので、立看板やしっかりした展示など準備する受付係やカメラ・ビデオの記録係などがあって学校行事として定着しているようである。また学生にはスーツにネクタイ着用との通知が出ていたようで他校に見られない雰囲気があった。

今回は「地域経済と原子力産業を考える」とのテーマで各グループ共通である。青森県の大学としての思いから先生が選ばれたようであるが、我々シニアにとっても学生にとっても些かこなれにくいテーマであった。学生たちは既にグループディスカッションとして午前中に話し合っていたようであるが、電源三法交付金などの話について未だ生煮えのままであった。

学生は全員学部3年生であり、まだまだこのようなテーマに対する問題意識も薄く、もう少し原子力産業についての知識を踏まえた上でこの討論に入った方が望ましいと感じたことである。これは基調講演を聞いていた学生の反応からも感じ取れた。しかしながらシニアが誘導してしまった感があるものの彼らの出した結論は至極真つ当なものであった。参加した学生達は真摯に課題に取り組み、それぞれのレベルで吸収するところが多かったと思う。

今回の対話会を準備いただいた八戸工大の諸先生方ならびに畑中さんには深く感謝いたします。ありがとうございました。

#### (グループ-6) 早瀬佑一

- ・対話学生は機械、電気、環境の3年生7人。「地域経済と原子力産業を考える」との漠然としたテーマであり、事前に学生にもシニアにも、具体的な論点、ポイントが示されなかったため、焦点の絞り切れない散漫な対話になってしまったのは残念であった。
- ・学生は全員が「原子力工学コース」を選択し、原子力発電所でのインターンシップや施設見学を通じて、基礎知識と一定の見解は持っている。一人を除いて全員が再稼働には賛成、安全実績の

蓄積が重要、メディア報道は偏っており自分で現場を見ることが大切、中学校からの原子力教育が重要、就職先として電力会社を希望する等、頼もしい考えを聴くことが出来た。

- ・短時間の1回限りの交流を効果あらしめるためには、学生、シニア双方の事前準備が重要ではないだろうか。出来るだけ具体的な論点、疑問点を前もって共有すれば、当日の対話が一層深まるのではないかと感じた。
- ・初めて参加した学生対話会で、原子力県青森県で学ぶ大学生の率直な意見、考えを聴くことが出来たのは、貴重な経験であった。

#### (グループ-6) 矢野歳和

第6グループは機械情報技術、電気電子システム、バイオ環境工学の各学科3年の学生計7名が出席し、シニアの出席者は早瀬佑一氏（元東電）と矢野（元宮城大、元IHI）の2名。まず学生側で司会者、書記、代表発表者を決めた。原子力の安全性の認識は現地施設の見学や研修の経験が大きく、子供のころからの教育が必要と述べ、偏ったマスメディアの報道を問題点として上げている。また原子力の地域経済に及ぼす効果や影響が大きいことも自覚している。ほとんどの学生は再稼働に賛成であり、一人だけ安全性を懸念した学生がいたが、シニアから以前と同じ規模の事故リスクは極めて低いこと、起きたとしても放射性物質の外部への放出量は格段に少なく、環境への影響は極めて小さくなる対策をとっていることを説明した。

八戸工大には各学科横断的に原子力工学コースがあり、1年から4年まで毎年半年間の各週に講義や研修がある。3年次のシニアとの対話以前には大間、東通、六ヶ所など現地の施設を見学し、また研修を受けていることが学生の理解を深めている。全体の発表では、再稼働を多くの学生が認め、年配者の反対より若い人の賛成の意見を聞いてほしいこと、原子力の理解は義務教育から必要なこと、原子力が地域の経済や雇用に役立っていること、この地域が日本のエネルギーを支えていることなど、学生の積極的な考えが多く出ていて原子力の教育が進んでいると感じた。

## (13) アンケート結果とまとめ

(とりまとめ) 川合将義

### 2017年2月3日八戸工大「学生とシニアの対話」事後アンケート結果

従来同様に対話会終了直後に学生からアンケートを採集した。今回の対話会では「地域経済と原子力産業」を共通テーマにしたこともあって、従来とは違った傾向が出たかが興味深い。

対象学生は、43名全員工学部の3年生である。原子力系13名、非原子力系24名、所属無回答者が7名である。一人は、両系にまたがっているとしている。

進路については、

就職希望 38名：電力 7、原子力関連メーカー 6、メーカー 8、研究機関 2、その他 16  
未定 3

進学希望 3名：原子力系分野 2、その他の分野 2

無回答 3名

どちらも重複回答があるため、回答者数より多くなっている。

以下は、各アンケートの結果を示すが、学生は4学科にまたがっているためか、アンケート結果の理由がかなりばらついており、全てを示すと非常に長いものになるため、適宜まとめて示す。

#### (1) 講演の内容は満足いくものでしたか？その理由は？

とても満足した 47%  
ある程度満足した 51%  
やや不満だ 2%

非常に満足度の高いことが分かる。経験豊かな講師が青森の原子力施設の歴史的な展開をかなり詳細に説明されたもので、学生の関心と呼んだことがわかる。六ヶ所村の施設の歴史的経緯が分かったことにも感慨深いという感想でしょう。とにかく、普通の講義では聞かれないもので、初めて聞く内容で、中身が濃かったという声が上がっている。

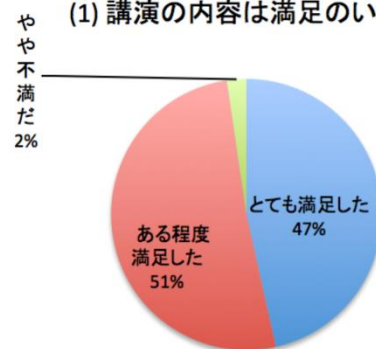
これを基に地域産業と原発について対話が行われたため、シニアと詳しく長時間話せたとか、学生とシニアの着眼点の違いを知る事ができたという感想が上がっている。

#### (2) 対話の内容は満足いくものでしたか？

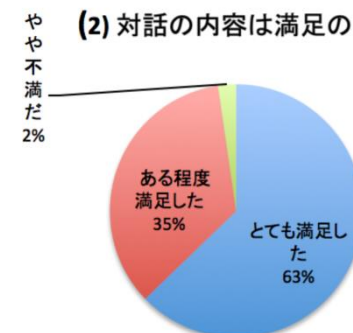
その理由は？

とても満足した 63%  
ある程度満足した 35%

(1) 講演の内容は満足いくものでしたか？



(2) 対話の内容は満足いくものでしたか？



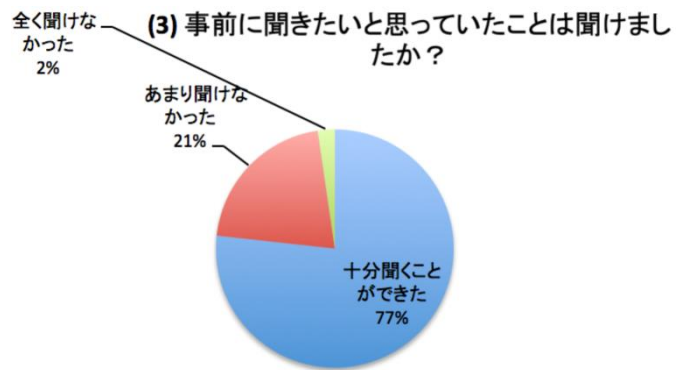
やや不満だ 2%

これも満足度が高い。経験豊かなシニアが、原子力のことは勿論、それ以外のことを含めて学生からの質問に対して即座にかつ丁寧に答えてくれたこと、そして、現場のことや原子力の知識とともに考え方などで得られるものが多かったという感想が寄せられている。物事の見方についての違いを感じたようで、シニアと学生との目線の違いを複数の人が指摘している。

ただし、シニアはしゃべりすぎのせいと思うが、少し対話不足に感じたとの意見もある。

### (3) 事前に聞きたいと思っていたことは聞けましたか？

十分聞くことができた 77%  
あまり聞けなかった 21%  
全く聞けなかった 2%



前の質問に比べると満足度が落ちている。

[このあとの結果から想像するに、対話において共通テーマに囚われて、通常多くの人に関心を抱く原子力の安全性やエネルギーの問題についての議論が行われなかった班があったようで、その反映かも知れない。今後

の運営にも関わることであるが、学生の関心事や希望も聞いて、少しでもよいかからそのことについて触れることが必要に思われる。] 註：[ ] 内は、とりまとめ者の私見。以下』同様。

### (4) 今回の対話で得られたことは何ですか？

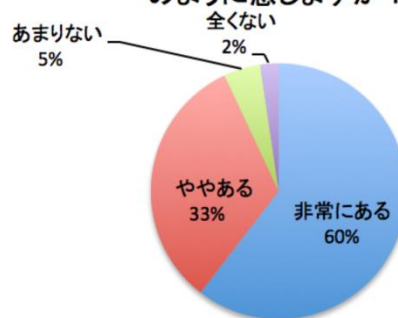
いろいろなものが挙げられた。以下に列举する。

- 実際に原子力関連で働いたシニアの知識、経験、意見、考え
- 原子力の安全性、原子力に対する考え方、正しい知識
- エネルギー使用の変化、原子力の必要性、原発は、今後どうすれば良いか
- 原子力発電所、原子力産業が地域産業や経済に深く関わっていること
- 反原発の声に対してシニアがどう思っているか
- メディア情報への対応と判断力をつけることの重要性
- 原子力だけでなく、企業の話も聞いたので就活の参考になった
- 自分が今まで考えていなかった物事の見方、目線の違い
- 自分の意見を伝える力の必要性

### (5) 「学生とシニアの対話」の必要性についてどのように感じますか？

非常にある 60%  
ややある 33%  
あまりない 5%  
全くない 2%

### (5) 「学生とシニアの対話」の必要性についてどのように感じますか？



シニアとの対話の意義は、93%が感じている。理由は、シニアの経験に基づく原子力について

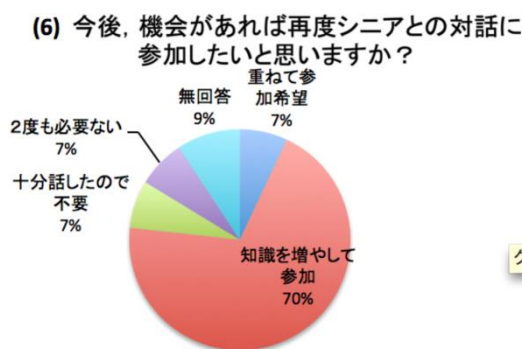


の正しいと評価された知識、幅広い世界観と意見、企業経験が今後の進路を決めるための参考になる。今回、学生同士だけでは得られない深い対話ができ、楽しかった。そのことで、多くの人と意見交換をすることを感じたなどである。

但し、学生同士ではたどり着けない結論に導いてくれたとの意見もあったが、シニアは、誘導し過ぎていないかを考えてみることも大事であろう。また、「アマチュアだけで話し合うのではなく、プロも混ぜるべきだ。」 「対話の内容を分かり易いものが良い。」という意見もあった。何か回答内容に不満があったのかも知れない。

### (6) 今後、機会があれば再度シニアとの対話に参加したいと思いますか？

|                   |     |
|-------------------|-----|
| まだまだ話したりないので参加したい | 7%  |
| もっと知識を増やしてから参加したい | 70% |
| 十分話ができただからもういい    | 7%  |
| 二度も必要ないと思うからもういい  | 7%  |
| 無回答               | 9%  |

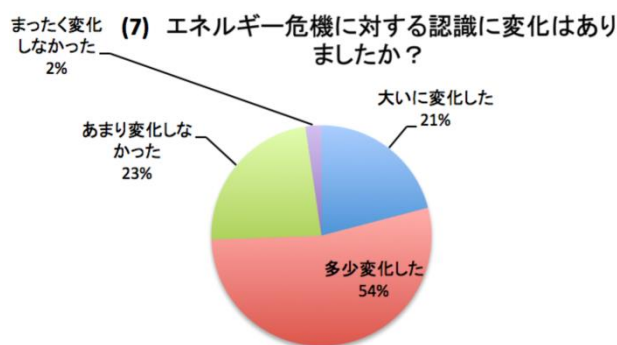


対話の意義を感じつつ、シニアと対等に議論できなかったためであろう、もっと知識を増やしてから参加したい学生が多い。不要としたのは、聞きたい

ことは聞けたというのと、シニアのしゃべり過ぎにうんざりも含まれているかも知れない。無回答者は、このような対話の意義を感じていないということの現れと思われる。重ねて話したいのは、対話のテーマが限定されていたことで聞きたいということと、より深い議論を求める声と思われる。

### (7) エネルギー危機に対する認識に変化はありましたか？

|             |     |
|-------------|-----|
| 大いに变化した     | 21% |
| 多少变化した      | 54% |
| あまり变化しなかった  | 23% |
| まったく変化しなかった | 2%  |



エネルギー危機についての認識に変化があったのは、75%である。でも、その変化は大して大きくない。

大いに变化した学生は、将来石油の価格が変動する可能性があり、原発なしでは危険である、原発はリスクを最小限にしている事が分かったと記している。一方、将来を担うエネルギーを探すべきという意見も寄せている。また、「原料の予算が高過ぎ」という意見もあった。

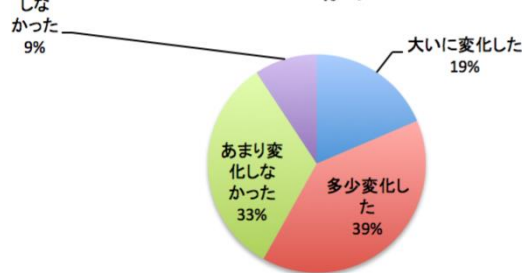
多少变化したと言う人は、今日初めて聞いた内容もあったとか、将来のことであまり気にしていなかったとか、気にするきっかけになったからという理由と、日本のエネルギー危機について漠然と感じてはいたが、対話を通じて日本のエネルギー自給率がとても低く、自分が思った以上に深刻だということを実感したという意見であった。

あまり変化しなかった人も、将来問題としていたのを思い直したとか、研究等で問題自体既に知っていて、危機感を持っていたと記した。但し、今回の対話でエネルギー危機について話題に昇らなかったというコメントが2件あった。

### (8) 原子力に対するイメージに変化はありましたか？

|             |     |
|-------------|-----|
| 大いに变化した     | 19% |
| 多少变化した      | 39% |
| あまり变化しなかった  | 33% |
| まったく变化しなかった | 9%  |

(8) 原子力に対するイメージに変化はありましたか？



原子力に対するイメージは、青森という土地柄から、かなり形成されていると思われる。そのため、対話によって変化した人は58%と、他の質問に比べれば高くない。

大いに变化した人は、知識のあるシニアから正しい情報を得て、安全性を確信したことと必要性をより強く感じたとした。

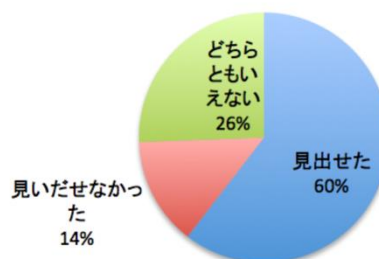
多少变化した人は、原子力が危険なものというマイナス面だけでなく、良いイメージを持てるようになった、(メディア)情報や見た目で判断するだけではないという意見を書いた。と同時に原子力の活動の難しさも知ったとした。

変化しなかったとした人は、講義やインターシップ、研修などでイメージが固まっていて、対話しても変えることもないとした。これらの人は、概ね原子力に対して肯定的な意見だったが、危ないというイメージが変わらないとした人もいた。

### (9) 今回の対話で自分の学科との関連性を見出すことができましたか？

|           |     |
|-----------|-----|
| 見出せた      | 60% |
| 見いだせなかった  | 14% |
| どちらともいえない | 26% |

(9) 今回の対話で自分の学科との関連性を見出すことができましたか？



今回の対話テーマは地域経済も含むものなので、全ての学科が関連していると言えるが、原子力との関連で回答したと思われる。その結果が60%という数字になった。それぞれの意見は以下の通りである。

原子力系の人にとっては、当然、原子力施設管理、プラントのことで、電気系は電気そのものと発電、さらに講義に原子力を学ぶ事で、情報系はプログラミングなどの情報処理で、環境系は環境問題を通じて認識していることを挙げた。また、原子力は総合技術という認識で機械系が含まれるとの回答もあった。

見出せなかった理由には、学科と関連のある話題が出なかったからとか、そこまで深く考えなかったからという理由が挙げられた。[こうした意見が出ないようにするためには、シニアが「原子力は総合科学技術であること、さらには環境問題、経済や法律問題も含んでいること」を伝える必要であろう。]

### (10) 対話の内容から将来のイメージができましたか？その理由は？

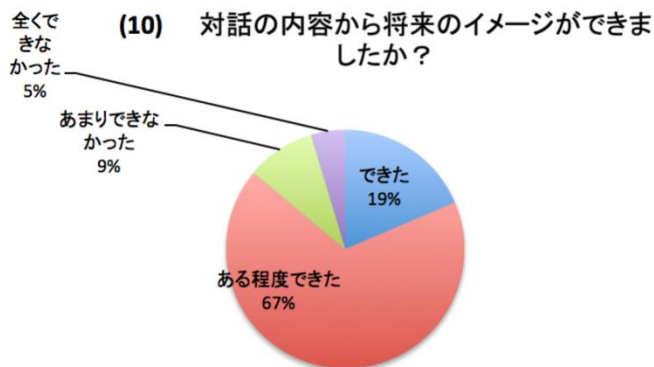
|           |     |
|-----------|-----|
| できた       | 19% |
| ある程度できた   | 67% |
| あまりできなかった | 9%  |
| 全くできなかった  | 5%  |

対話を通じて将来のイメージをつかめたとする人が 86%いて、対話の意義があったと言えそうである。

できたという人は、原子力が青森に役立ち、核融合炉や MOX 燃料など仕事が色々あって、良い製品作りをしようとの思いを書いた。

ある程度できた人は、シニアが様々な内容を分かり易く説明してくれたので、将来の日本には原子力発電が必要不可欠と思って、原子力の将来を担う職に就きたいという人から、少数意見だがこれからは不安という人までいる。

あまりできなかったという人は、率直に将来のイメージはできなかったという意見と、やはり地域社会のイメージが悪いため、受け入れてもらうのは難しそうという理由が挙げられた。全くできなかったという人は、原子力関連に就職を考えていないからという理由を挙げた。



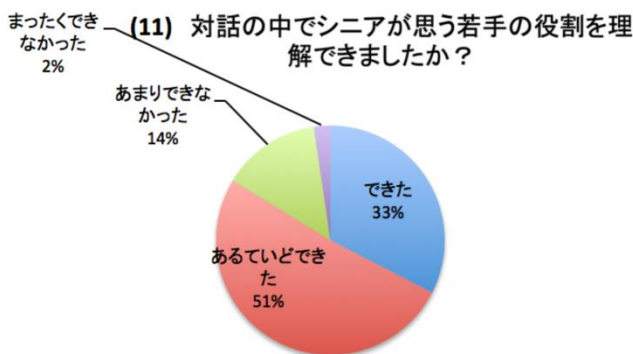
### (11) 対話の中でシニアが思う若手の役割を理解できましたか？

|            |     |
|------------|-----|
| できた        | 33% |
| ある程度できた    | 51% |
| あまりできなかった  | 14% |
| まったくできなかった | 2%  |

シニアから学生に期待する役割が伝わったかということ聞いたものであるが、一応 84%の人が伝わったと思っている。どう理解しているかは差し置いて、学生なりに期待した役割とともに理由を挙げる。

まず、理解できたと言う人は、原子力の正しい知識を伝えて、安全性認識を広めること、これからのエネルギー産業を支えて行くこと、原子力のイメージを良くして行くこと、さらにシニアが持っていない知識の共有とシニア知識を受け継いで若手の育成まで挙げた。ある程度できた人も原子力の正しい知識と技術力を持ち、原子力産業を支えて受け継いで行くということで、前者と殆ど変わらない。

あまりできなかったという人は、対話でそういう話が出なかったのと、良く理解できなかったためという理由を挙げている。全くできなかったという理由には、あまり話題にして来なかったからという理由があがっている。



### (12) 自分が思っていた若手の役割とシニアの考えは違いましたか？どのような違いがありましたか？また、シニアの考えを聞くことで、自分の考えに変化はありましたか？できるだけ詳しくお答えください。

複数の人が、日本の未来を考えていることや原子力への思いでは、シニアと大きな違いがないとしている一方、深い見識を持っていると評価するシニアの「原子力は十分に安全」という言葉に、自分たちは何も知らないのだなという感想を持ち、原子力を推進することの必要性を感じて、自分等の世代が意識を持って技術力をつけることが大事だという考えに変わったと書いている。シニアの意見を聞いて自分たちがどのように地域を盛り上げて行けるかを考え、実行して賑やかにできればと思うという人がいる一方、若者が未来を作るという頼もしい意見もある。

従来は、メディア情報を鵜呑みにしていた傾向もあったので、メディアに頼ることなく、自分の中で調べて危険性について考えると述べている。

少数であるが、核融合炉実用化後の原発は残るか否かでシニアと意見の違いがあったこと、今日何をするのか良く知らされていなかったことで、考えに変化など無かったというコメントもある。

### (13) 本企画を通して全体の感想・意見などがあれば自由に書いてください。

対話について自他の意見をぶつけ合う事で価値観の違いや自分の知らない事を聞く事ができ、内容も濃く、充実して楽しかったという意見を述べている。リアルな話を聞いて良かったとのこと。また、専門家と学生とでは、考えることに差があることが分かった。そして、六ヶ所村のコンサートホールに行きたい、外国の再処理工場にも行きたいとの感想がある。

対話会に対して以下の注文があった。机の位置を考えて欲しい。[これは、各班が長い配列で議論せざるを得なくて、両端の人の発言が聞こえ難いという問題があったので理解できる。]

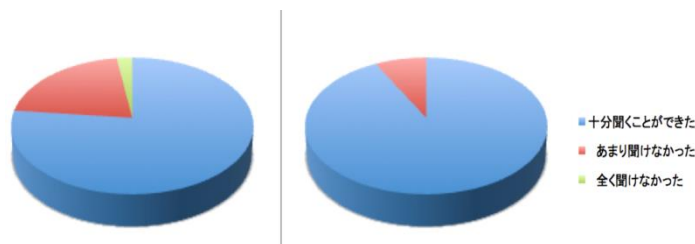
事前に知らされていない内容が多くあったので、前段階で内容や日程を伝えて欲しかった。(12)でも計画のアナウンス不足の指摘があった。計画の周知徹底を願いたい。また、(3)で聞きたいことを聞けなかったという意見もある。[そうした不満を解消するためにも、学生が聞きたいことについてメールで事前にやりとりし、可能なら学生から質問を受けることが望ましい。考慮願いたいところである。]

### (14) 原子力系の意見の傾向

戸工大には原子力系があり、今回も43名の学生の中で13名が原子力系である。そこで、彼らの意志や行動パターンが、その他の学生とどのように違うかを比較してみた。

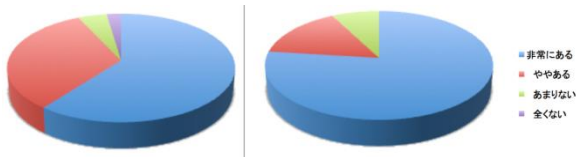
まず、就職について原子力メーカーをどれだけ選択しているかを見てみると4名で、率にして31%、非原子力系30名中4名の割合13%の2倍強であり、思ったほど多くない。

### (3) 聞きたいことは聞けたか？



原子力中心の話であり、それへの関心の高い原子力系学生の満足度の高い事は、当然ともいえる。

(5) 「学生とシニアの対話」の必要性



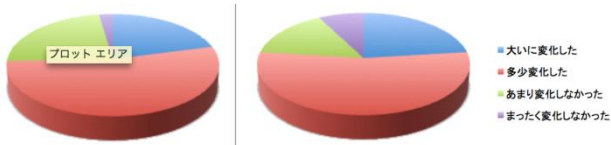
対話の必要性を高く感じている。

(6) 再度シニアとの対話に参加するか



ほぼ同じパターンで、知識を増やして参加したいという意見

(7) エネルギー危機に対する認識の変化



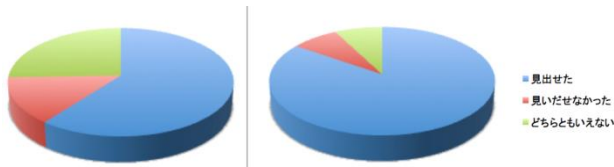
ほぼ同じである。エネルギー危機については、3年生で原子力系といえども、一般とあまり変わらないようだ。

(8) 原子力に対するイメージの変化



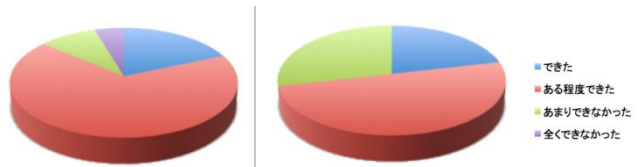
原子力系の方が、変化が少ない。原子力系は、講義などで、知識を得ており、ある程度イメージが固まっているため。

(9) 自分の学科との関連性を見出せたか



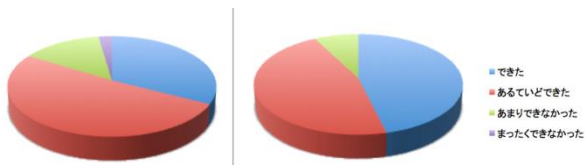
原子力系は、高率で関連性を見ている。[見出していないというのは、対話内容に偏りにあったか、学生の意識のずれかも知れない。]

(10) 将来のイメージができましたか



あまりできなかったという回答は、原子力系。[原発の再稼働や核燃料サイクル施設の停滞の現実を見てのことに思われる。シニアは、その打開策も述べる必要がある。]

(11) シニアが思う若手の役割を理解できたか



この役割を原子力におけるものと考えれば、理解できたという割合が原子力系で高いのは、当然とも思える。即ち、シニアの語る言葉は、原子力系の方が良く理解でき、共感しやすいからと言える。

以上、アンケート結果について報告致します。今後の対話会の発展に役立てて頂ければ幸いです。